

石井陽子「鹿の惑星」Deer Planet

2011年3月、久しぶりに奈良を訪れた私は、カメラを手に早朝の街に出た。そこで見かけたのは、ホテルの前で角を突き合せて戦う雄鹿や、交差点の真ん中に凜と立つ鹿のカップル。人影まばらな街で威風堂々とふるまう彼らは、街の主であるかのように見えた。

神護景雲元年（767年）、平城京鎮護のため春日大社の祭神に勧請された武甕槌命（たけみかづちのみこと）は鹿島神宮から白鹿に乗って御蓋山（みかさやま）に来られたという。以来、奈良の鹿は神の遣いと呼ばれ、天然記念物として保護されている。奈良の鹿愛護会によると、2021年7月16日現在、奈良公園には1,105頭の鹿がいる。鹿たちは日の出とともに森を出て、街中で文字通り道草を食いながら奈良公園へと向かい、夕方になると泊まり場へと帰っていく。町家が並ぶ古都が県庁所在地になっても、その営みは変わらず続いてきた。

奈良の鹿は観光客のアイドルだ。一方、北海道をはじめ多くの地域で鹿は害獣とみなされている。

かつて蝦夷地は原始の森に覆われ、山野には満ち溢れるほどのエゾシカがいたという。アイヌ民族は鹿を「ユク」と呼び、狩りをして、肉や毛皮を活用していた。近年、北海道ではエゾシカの生息域が拡大し、市街地にも出没するようになった。いわゆる「アーバンディア」たちは、住宅地を悠然と歩き、連れだって道路を横断する。北海道によると、2020年度のエゾシカの推計生息数は約67万頭で2011年より約10万頭減少。一方、同年度には狩猟と有害捕獲により13万頭近い鹿が捕らえられた。

鹿が棲息地によって天然記念物として保護されたり、害獣として駆除されたりするのは、人間の都合だ。ある意味、鹿は人間の矛盾を映す鏡のような存在でもある。だが、鹿たちは人間が引いた境界線を軽やかに越え、たくましく生きている。そんな姿をレンズ越しに見ると、そこには「鹿の惑星」が広がっている。

I S H I I Y o k o

石井 陽子 ISHII Yoko

[略歴]

山口県生まれ。神奈川県在住。レンズ越しに見える世界に魅せられて、国内外を旅して動物を撮影している。2011年3月より、奈良、宮島などで人の街に棲み、人間たちの決めた境界線を軽やかに越えて街を闊歩している鹿たちを捉えたシリーズを開始。2015年12月リトルモアより写真集「しかしか」刊行。2016年1月銀座ニコンサロンで初の個展開催。2016年11月、米・サンタフェでレビュー・サンタフェに参加。2019年レンズカルチャーのストレート・フォトグラフィ・アワードでレベッカ・ノリス・ウェブ選の審査員賞を受賞。

2014年2月 米・フィラデルフィア Onward Compe ファイナリスト 2014年8月 マレーシア・ペナン OBSCURA Festival of Photography で展示。2014年12月 カンボジア・シェムリアップ Angkor Photo Festival スライドショー上映。2016年1月 銀座ニコンサロンで個展「境界線を越えて」を開催 2016年2月 大阪ニコンサロンで個展「境界線を越えて」を開催 2017年9月 独・ウルムの Stadthaus Ulm による企画展「Urban Wildlife」で展示 2018年1月 神戸 Mirage Gallery で個展「Life」を開催 2019年6月 ニュージーランドのオークランド・フェスティバル・オブ・フォトグラフィで招待作家として展示 2019年9月 東京・馬喰町のギャラリー KKAG で、個展「鹿の惑星」を開催。

lensculture、Future Shoot、Wired.com、The Independent、Le Monde など海外のメディアで作品掲載多数。